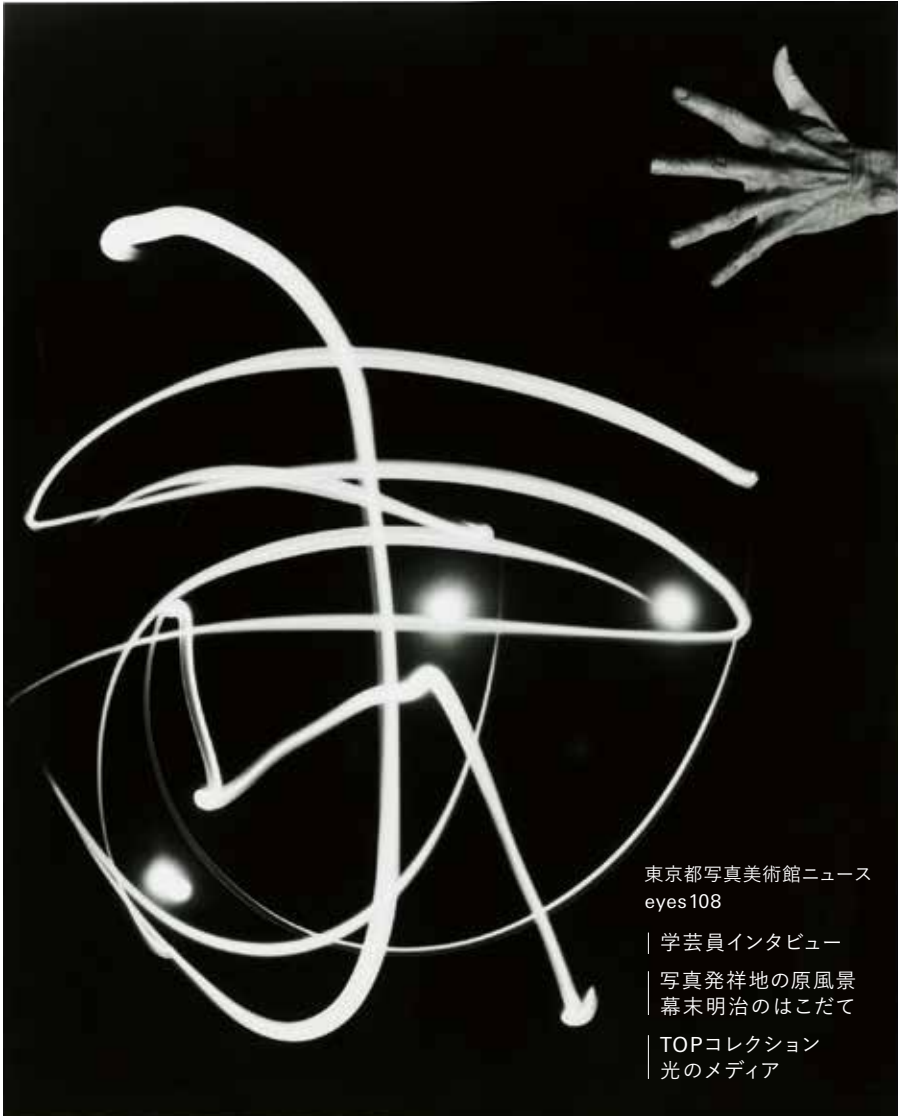


TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース
eyes108

| 学芸員インタビュー

| 写真発祥地の原風景
幕末明治のはこだて

| TOPコレクション
光のメディア

「TOPコレクション 光のメディア」展 「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」展

学芸員インタビュー

美術館にはコレクションと調査研究という重要な役割がある。前者は優れた作品を評価し次世代へ残していくためであり、後者は作品について調査研究し、その本質に近づくことだ。そして、展覧会は、コレクションと研究の成果を観客と分かち合う貴重な機会である。

この春に開かれる「TOPコレクション 光のメディア」と、「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」は開館以来東京都写真美術館が行ってきたコレクションと調査研究の成果が凝縮された展覧会だ。それぞれの展覧会を担当する学芸員に開催までの舞台裏を聞いた。

「見えないもの」を 写した作家

「TOPコレクション 光のメディア」の担当は鈴木佳子学芸員。これまで「明日を夢見て：アメリカ社会を動かしたソーシャル・ドキュメンタリー」(2004年)「佐藤時啓 光一呼吸 そこにいる」(2014年)「杉浦邦恵 うつくしい実験」(2018年)など多数の展覧会を手がけてきたベテランだ。今回のコレクション展のキーワードは「光」である。

鈴木:「写真は光があってこそそのメディア。写真の特性を生かした作品制作に取り組み、新しい表現を生み出そうと戦うアーティストたちの作品をぜひご覧いただきたいです」

東京都写真美術館のコレクションを中心に選ばれた作品は、19世紀から21世紀までと幅広い。中でも重要な作家として鈴木学芸員が挙げたのが20世紀前半のアメリカで活躍した巨匠、アルフレッド・スティーグリッツだ。

鈴木:「この10年くらい、写真作品によって“見えないものをイメージにする”ことを試みる作家や作品が目立っています。その元祖的な存在がスティーグリッツであり、彼の《イキヴァレント》です」

写真は見えるものを写す。しかし、作家たちは写真を使い肉眼では見えない世界を描く。あるいは写真にすることで肉眼で見えているものの意味を変えようとしてきた。スティーグリッツはそうした写真の力を世に知らしめたパイオ

ニアのひとりだ。《イキヴァレント》はスティーグリッツ晩年の作品。写っているのは空と雲である。しかし彼が描きたかったのは空や雲ではなく、それらに託した自身の心のうちだった。目に見えるものを通して、目に見えないものを想像させる。たしかにスティーグリッツは写真の特性を生かし、見えないものを表現しようとしたという点で、この展覧会にふさわしい。しかも折良く令和4年度に《イキヴァレント》を収蔵することができ、この展覧会がお披露目となる。

コレクション展の魅力

スティーグリッツのように約100年前に活躍した巨匠の作品から、いままさに活躍中の田口和奈、糸井潤のような現代作家まで「TOPコレクション 光のメディア」に出品される作品は幅広い。コンセプトはすでに紹介したように「光」であり、「見えないものをイメージにする」だが、もう一つ「芸術としての写真」という枠組みがある。

鈴木:「この展覧会のもう一つの核となるの



「TOPコレクション 光のメディア」展
2F 2022.3.2|水|-6.5|日|



アルフレッド・スティーグリッツ《イキヴァレント》1929年
ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

が、写真家のマイナー・ホワイトと、彼が中心になって創刊したアメリカの写真雑誌『アパチャー (Aperture)』です。マイナー・ホワイトはアンセル・アダムスやドロシア・ラングらと芸術写真のための写真雑誌として『アパチャー』を創刊し、現在まで刊行が続いています。アパチャーの写真家たちがメンターとしていたのがスティーグリッツなんです」

芸術としての写真という枠組みで異彩を放つ出品作家がユージン・スミスだ。ご存じの通り、昨年伝記映画が日本で公開されたフォト・ジャーナリストである。

鈴木:「スミスは芸術表現をしたいという衝動が強く、プリントの完成度にこだわっていました。ジャーナリズムと芸術表現の間で揺れ動いていた写真家なのです。しかもユージン・スミスは光っているものをたくさん撮っていて、本人も光っているのが好きでなぜか撮ってしまうと言っていたそうです。光へ向かって歩く子供たちの後ろ姿を描いた『楽園への歩み』もその一つですが、当館には充実したスミスのコレクションがあるので、今回はあまり知られていない作品も見いただけます」

東京都写真美術館にはコレクションが約3万6千点(令和3年3月時点)あり、コレクション展はその貴重な作品を公開する機会でもある。しかし企画展に比べて、また見る機会があると思われるのか、一般の関心を惹きづらいという難しさもある。コレクション展の意義について学芸員としてどう考えているのだろうか。

鈴木:「当館の専門調査員を長年され、展覧会も多数企画されていた故金子隆一さんが

『収蔵庫にあるもので良い展覧会をつくるのが学芸員の腕の見せ所だ』とおっしゃっていました。有名な写真家、よく知られている作品であっても、展覧会のコンセプトや、その写真の隣にどんな作品があるかで見方が変わります。よく知っているイメージであっても、新たな発見をしていただけるような構成の展覧会にしたいですね」

コレクション展は作品に新たな命を与える機会なのである。

写真渡来の街、はこだて

「TOPコレクション 光のメディア」が写真表現に焦点を当てた展覧会だとすると、「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」は日本の写真と歴史とを交差させる展覧会だ。芸術表現としての写真と貴重な記録でもある写真。この2つを同時に楽しめるのが東京都写真美術館という場所である。

「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」を担当するのは遠藤みゆき学芸員。「マジック・ランタン 光と影の映像史」(2018年)「澤田知子 狐の嫁いり」(2021年)などの展覧会を担当し、今回はそれまで初期写真を担当し、本展を企画した三井圭司学芸員から引き継ぐかたちで担当している。

遠藤:「今回の展覧会は、写真が渡来した場所をテーマにした『写真発祥地の原風景』シリーズの第二弾にあたります。第一弾の長崎展は2018年に開催しています」

ほとんどが東京都写真美術館の収蔵品

で構成される「TOPコレクション 光のメディア」とは対照的に、こちらの展覧会では約9割が他館から借りた作品、資料となる。

遠藤: 今回の展覧会では函館市中央図書館と市立函館博物館が所蔵する約130点の作品・資料のほか、初公開作品も含む約200点が一堂に会する貴重な機会です。

同じく写真発祥地である長崎、横浜と比較して、函館の写真にはどのような特徴があるのだろうか。

遠藤:「ロシアからの影響が大きいことですね。長崎、横浜は西欧世界からの影響が強いのですが、函館は地理的な要因から、とくに関係が友好的だった幕末、明治初期にロシアから写真技術や文化を吸収していま

した」

ロシアからの影響という点では、函館ハリストス正教会が所蔵する教会建造当時の写真が興味深い。では、展覧会の構成はどのようなものになるのだろうか。

遠藤:「三章構成になっています。第一章が函館について。函館の地理と開港地としての歴史、日本写真史の中での位置づけを紹介します。第二章では函館を撮影した写真家たちを取り上げます。作家の作品と来歴と、彼らが使っていた同時代の技術について紹介します。第三章が写真が記録した函館の町並みです。幕末から明治30年くらいまでの間にどう変化したか、写真から読み解いていきます」



「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」展

3F 2022.3.2 | 水 | - 5.8 | 日 |



浅野文輝《函館真景》明治15(1882)年 多色刷木版
函館市中央図書館蔵

場所に着目した展覧会だけに、函館という街を写真でどのように表現し、記録したのかが大きな見所となる。

遠藤:「函館の景観を絵で描いたり、写真に撮ったりするポイントには大きく2つあります。港から函館山を見上げる視点と、函館山から港を見下ろす視点です。とくに港から見上げる視点に関しては、絵図にもよく描かれていました。今回は、錦絵や絵図に描かれた函館の港と山と、その後、測量の技術が発達してつくられた地図、それらと写真の比較ができるような構成を行っています」

本邦初公開の 写真アルバム

展示作品の選定は複数の専門家によるもの。国立民族学博物館の大塚和義名誉教授、日本大学芸術学部写真学科の高橋則英特任教授が監修にあたり、東京都写真美術館の三井と遠藤のほか、市立函館博物館の奥野進学芸員、北海道立近代美術館の大下智一学芸員に協力を仰いだ。選定は函館・札幌・東京・大阪をつなぐオンライン会議で行い、田本研造、武林盛一などの写真作品とともに、本邦初公開となる写真アルバムも展示される。

遠藤:「野口源之助の《Esso Album》です。アイヌ研究の第一人者である国立民族学博物館の大塚先生が野口のアルバムをお持ちで、そのアルバムをお借りしてアルバムの中から、北海道各地のアイヌの人たちの生活風景を捉えた写真等を数点、展示する予

定です」

野口は職業写真家ではなく、長崎生まれで英語に堪能だったため、通詞(通訳)として活躍し、北海道では開拓使御用掛や函館県職員もしていた人物だ。

遠藤:「なぜ野口が写真を撮影したのか。なぜ鶏卵紙にプリントしアルバムとして残したかもわかっていません。ただ、同時代に田本やシュティルフリートが撮影したアイヌの人たちが、指示されたと思われるポーズをとっているように見えるのに比べ、野口が撮影したアイヌの人たちは日常生活の動きを止めない配慮が見られます。露光に必要な僅かな時間だけ、声をかけて動きを止めた場面もあるかと思いますが、できるだけ自然体で撮影したという印象を受けるものだと感じます」

美術館という性質上、展示作品は貴重な記録であると同時に、写真表現としての価値も求められる。野口源之助の写真のように、同時代のほかの写真家の作品と比較検討した上で価値を認められるのも、美術館ならではのといえる。

時代を超えて写真作品同士のつながりを感じることができる「TOPコレクション 光のメディア」と、写真が渡来した頃の時代へ写真を入口にタイムスリップできる「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」。写真の表現と記録という特性を生かした2つの展覧会は東京都写真美術館が約30年にわたって活動し、つくりあげてきた「価値」に触れる機会になるはずだ。

(インタビュー・構成 タカザワケンジ)

写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて

Geneses of Photography in Japan: Hakodate

3F 2022.3.2|水| - 5.8|日|

写真発祥地をとらえた初期写真を核に幕末・明治の姿を再構築する連続展の第二弾として「写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて」を開催します。

写真発祥の地は、写真との関わりが長く、膨大な写真が堆積しています。本シリーズ展では特に初期写真に注目し、写真と資料から、近代へと推移する日本の輪郭を再構築する試みです。

約150年前に江戸時代は終焉し、日本は近代国家へ歩みを進めました。北端の港湾都市であった箱館は、江戸時代後期に幕府の拠点が置かれ、蝦夷地経営や箱館戦争、開港といった歴史事象のなかで重要な役割を担うこととなります。1869年に蝦夷地は北海道と命名され、箱館も函館に改称されました。幕末期には、ロシア人より伝えられた技術を起点に写真文化が華開きます。最初の写真家である木津幸吉をはじめ、田本研造、武林盛一、井田倅吉などの在住する写真家と、野口源之助やライムント・フォン・シュティルフリートら来訪する写真家たちは函館の人々や街、文化を撮影しました。田本研造は、その技術を池田種之助ら弟子たちに伝え、弟子たちは函館に限らず北海道各地にその跡を残し、現代にその姿を伝えていきます。

本展は、幕末から明治の激動の地「はこだて(箱館・函館)」を、新たな切り口で捉え直す試みといえるでしょう。

第一章 はこだての歩み

今から約3万年前頃、現在の北海道に人類の定住が始まったと考えられています。やがて狩猟や漁労だけでなく、商品性のある当地の資源、ことに毛皮や海産物に



ライムント・フォン・シュティルフリート《HAKODADI》明治5(1872)年 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵

よる交易が盛んに行われるようになり、13世紀前後にアイヌ文化の原型が形成されます。17-18世紀には、本州から交易品を求めて、和人商人がこの地を訪れるようになり、和人の定住が本格化しました。

「はこだて」は、江戸時代には松前藩のもとで松前・江差とともに主要港として繁栄し、1802年には蝦夷地奉行(後の箱館奉行)が置かれ、幕府の直接統治の中心拠点を担います。幕末から明治になると開港により、ロシアを中心とする各国の領事館が置かれ、欧米文化の影響を強く受けるようになります。

戊辰戦争最後の戦いとなった箱館戦争を経て、1869年に蝦夷地は「北海道」、箱館も「函館」へ改称*され、1871年、札幌に開拓使の本庁舎が建てられると、北海道行政の中心は札幌へと移ります。しかし、その後も函館は北の港湾都市として、また北洋漁業の基地として、発展しました。

本章では、1793年の絵巻や箱館戦争の錦絵、1882年の多色刷木版による鳥観図など、初期写真だけでなく、多くの資料から「はこだて」をひも解きます。

*「開拓使事業報告 第1編」(大蔵省、1885年)に「(明治)二年本使出張所ヲ置キ箱館ヲ函館ト改ム」とある。

[観覧料] 一般 700円 ほか 各種割引あり

※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

[主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館



田本研造《(函館のパノラマ)》明治22(1889)年 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵

第二章 はこだてを捉えた写真家と幕末・明治の写真技術

箱館(函館)は日本における写真発祥の地のひとつであり、箱館(近世)から函館(近代)へと移りゆく中で日本写真史の礎を築く場でした。

本章はロシア人から写真技術を習得した田本研造、開拓使写真御用掛に任命された武林盛一などこの地で写真館を開設した人々と、公務でこの地を訪れて撮影を行った野口源之助や、開拓使の依頼によってこの地を訪れたライムント・フォン・シュティルフリートなど、函館に関わる写真家たちを紹介します。

また、幕末・明治期の写真技術を、カメラや三脚、原板等の撮影機材などの史料を交え、ネガ原板とプリント制作の両面から、現代とは大きく異なる原初的な写真技術を紹介します。

本章では、人や技術など「はこだて」の写真制作の側面から多角的に解説します。



1



4



5



2



3

第三章 はこだて鳥瞰

1897年に函館に函館要塞置かれ、軍事機密厳守のため、函館山への立ち入りは禁止され、市中での写真撮影でも許可が必要となりました。本章は、これ以前に制作された写真によって明治期の函館を俯瞰します。

パノラマ写真では、函館山から街を見下ろした構図の写真(函館港全景)群と函館山に向かった写真(函館市街全景)群を比較することで、度重なる大火や港湾工事によって変容する街並みを確認することができます。これらパノラマに点景として写る建築物や山々は、シュティルフリートらによってクローズアップした視点から撮影されており、現在は失われた明治時代の函館の姿を知ることができます。

近代化のなかで、変わりゆく街並みやそこに生きた人々など、ミクロとマクロの両面から捉えた写真を集めました。本章では、第二章で紹介した写真家たちの作品を中心に「はこだて」の姿を初期写真によって鳥瞰します。

- 1: 井田倭吉《花ゴザを編むアイヌ(女性)》明治10(1877)年頃 鶏卵紙 函館市中央図書館蔵
- 2: 田本研造?《フランス軍士官と旧幕府脱走軍士官》明治元(1868)年～明治2(1869)年 鶏卵紙 函館市中央図書館蔵
- 3: 月岡芳年《諸國武者八景 函館港》明治4(1871)年 多色刷木版 函館市中央図書館蔵
- 4: 四切判野外用組立暗箱 20世紀前半 日本大学藝術学部蔵
- 5: 浅野文輝《函館真景》明治15(1882)年 多色刷木版 函館市中央図書館蔵

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



TOPコレクション 光のメディア

Light as Medium: The Top Collection

2F | 2022.3.2 | 水 | - 6.5 | 日 |

東京都写真美術館では収蔵作品のなかから、選り抜かれた名品を定期的に紹介しています。本展「TOPコレクション 光のメディア」では、英語のフォトグラフ(Photograph)の語源が「光で描く」という意味を持つことに注目し、記録性を超えて生み出される「創造性」に焦点を当てた作品を展示します。

このメディアの本質は光を支持体(紙など)に取り込むことにあり、アーティストたちは光の作用を用いてさまざまな表現形式を生み出し、時には不可視のエネルギーさえも画像につなぎとめようと試みました。

たとえば、TOPコレクションに新たに加わった、アルフレッド・スティーグリッツの《イキイヴァレント》(日本語では「等価物」という意味を持つ)は、彼が1922年から30年代にかけて雲を撮影し、抽象的なイメージで表現した作品です。空に浮かぶ雲そのものの記録を目的とせず、その被写体を通して、作家の感情や深い内面と同等なものを写しだそうとしました。スティーグリッツにとっては、自身の知覚や解釈を写真に反映することが重要だったのです。その意図は撮影と印画、両方の段階で繊細かつ忠実に発揮されているため、スティーグリッツの作品を前にした時、完成度の高さはいうまでもなく、言葉では容易に置き換えることのできない作者の強力なインスピレーションを感じ取ることができます。

本展ではスティーグリッツをはじめ、創造性あふれる29人のアーティストたちによる作品を展示。TOPコレクションに加え、アーティストやギャラリー、コレクターが所蔵する貴重な作品を集め、「光のメディア」がかなでる魅力的な空間へと皆さまを案内します。



1

出品作家

アルフレッド・スティーグリッツ
マイナー・ホワイト
アンセル・アダムス
バーバラ・モーガン
ウォルター・チャペル
ジャロミール・ステファニー
ポール・カポニグロ
エドモンド・テスケ
田口和奈
W.ユージン・スミス
ジェームズ・ウェリング
佐藤時啓
糸井潤
ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
ラースロー・モホイ=ナジ
マン・レイ
ロール・アルバン=ギョー
瑛丸
杉村恒
杉浦邦恵
スーザン・ダージェス
クリスチャン・シャド
アルヴィン・ラングドン・コバーン
ハリー・キャラハン
ヨゼフ・ステック
エメット・ゴウウィン
アンナ・アトキンス
アンドレ・ケルテス
ポール・ストランド



2



3

4

- 1) マイナー・ホワイト《窓枠の白昼夢、ロチェスター、ニューヨーク州》1958年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
 - 2) バーバラ・モーガン《マーサ・グラハム、世界の手紙、キック》1940年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
 - 3) アンセル・アダムス《エル・キャピタン滝、ヨセミテ渓谷、カリフォルニア州》1968年頃 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
 - 4) W.ユージン・スミス《朝日の中を歩く一家》(移民労働者)より 1953年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
- 表紙) バーバラ・モーガン《ピュアなエネルギーと神経過敏な人》1941年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

【観覧料】一般 600円 ほか 各種割引あり

※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

【主催】東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



本城直季

(un)real utopia

B1F 2022.3.19|土| - 5.15|日|

本城直季は、大判カメラの「アオリ」を使用して、都市の姿をジオラマのように撮影する独特の表現で知られる写真家です。その作品はまるでミニチュアの世界のようで、私たちにこの世界の実在と虚構を問いかけると同時に、被写体である「まち」や「ひと」に対する、作家のあたたかく愛おしげなまなざしを感じさせます。

初の大規模個展となる本展では、木村伊兵衛写真賞を受賞した「small planet」シリーズをはじめ、未公開を含む約200点を展示、これまでの仕事を一挙にご紹介します。



《Tokyo, Japan》〈small planet〉より 2005年 © Naoki Honjo



《Tokyo, Japan》〈small planet〉より 2021年 © Naoki Honjo

【観覧料】一般1,100円 ほか 各種割引あり

※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

【主催】朝日新聞社／文化庁／独立行政法人日本芸術文化振興会

【共催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館



APAアワード2022

第50回公益社団法人日本広告写真家協会公募展

B1F 2022.2.26|土| - 3.13|日|

APAアワードは1961年より開催されている歴史ある写真の公募展で、これまで著名な写真家を数多く輩出してきました。「広告作品部門」は実際に世の中に流通した広告写真から審査し選出し、「写真作品部門」はテーマに沿って自由な発想と写真表現で競い合う写真コンペです。今年度のテーマは「しゃん」。全国から780作品、2117枚の応募があり、128の作品が入賞入選に選ばれました。（「広告作品部門」の作品展示は行いません。）

【観覧料】一般500円 ほか 各種割引あり

※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

【主催】公益社団法人日本広告写真家協会（APA）【共催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 【後援】経済産業省／文化庁



〈お問い合わせ〉

公益社団法人日本広告写真家協会事務局
03-5545-5015

〈公式サイト〉apa.or.jp

1F HALL / 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▶



1F アンコール上映『A.W.アピチャップンの素顔』

アートと映画の両分野で活躍するタイのアピチャップン・ウィーラセタクン。2022年3月より、監督作品『MEMORIA メモリア』が全国公開されることを記念して、同作の制作秘話が詰まったドキュメンタリー『A.W.アピチャップンの素顔』をアンコール上映いたします。映画監督の顔も持つカナダ人俳優コナー・ジェサップが、友人でもあるアピチャップン・ウィーラセタクンと旅をしながら語るドキュメンタリー。

2018年／カナダ／カラー／DCP／47分／
16:9／英語・日本語字幕
出演：アピチャップン・ウィーラセタクン、
コナー・ジェサップ



© A.W. A Portrait of Apichatpong Weerasethakul (2018)
directed by Connor Jessup

【上映期間】2022.3.15(火) - 3.21(月・祝)

【休映日】2022.3.19(土) 【料金】1,300円均一

〈お問い合わせ〉トモ・スズキ・ジャパン

TEL.090-8819-4675 mail@tomosuzuki.com

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》

キャノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》

キャノンマーケティングジャパン(株)
グッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》

アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》

(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害
保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エーजीピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーション
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイ
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)

カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・
クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キックマン(株)
(株)紀伊屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三菱石油(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
JXTGホールディングス(株)
(株)JT
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)

信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
カトーレック(株)
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新国際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)高島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・
コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
電源開発(株)
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタジオ
東京造形大学
東京総合写真専門学校
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ドーム

(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアル
アーツ
(株)東京美術倶楽部
(株)スタジオポリタステレ
ジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロマンエージェン
ト
(株)Nana
(株)ニコンイメージングジャ
パン
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルディング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本広告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケー
ションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディア
パートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ピックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング

(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)プリンスホテル
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・
アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼



2F SHOP
ミュージアム・
ショップ

NADIFT
BAITEN

展示会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・
ショップ。心地よい陽気のもと、お出かけしたくなるこの季節。ひと
つひとつ手織りでつくられたカメラストラップ「GEZELLIG(ヘゼリ
ヒ)」や本格クライミングロープを使用した「YOSEMITE CAMERA
STRAP」をお手持ちのカメラに合わせて、撮影に出かけてみては
いかがでしょうか。

GEZELLIG(ヘゼリヒ)カメラストラップ 4,510円(税込)
YOSEMITE CAMERA STRAP【126cm】 11,880円(税込)



詳細
ページは
こちら▼



[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで) [TEL] 03-6447-7684
[定休日] 毎週月曜日ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

ビーガンの方にもお楽しみいただける定番メニュー「やさいの
カレー」は、スパイスとしょうがで体が温まります。人気のカフェは
季節によってフルーツを変えてご用意していますので、鑑賞後の
休憩など、どうぞお気軽にお立ち寄りください。



詳細
ページは
こちら▼



[営業時間] 10:00-21:00 ※当店は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定休日] 毎週月曜日ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ▶



	3F	2F	B1F	1F
2022 2				
3	写真発祥地の原風景 幕末明治のはこだて (収)	TOPコレクション 光のメディア (収)	APAアワード2022 2.26(土) - 3.13(日)	アンコール上映 『A.W.アビチャップンの素顔』
4	3.2(水) - 5.8(日)	3.2(水) - 6.5(日)	本城直季 3.19(土) - 5.15(日)	3.15(火) - 3.21(月・祝)
5				

(収) 収蔵展 (企) 企画展

東京都写真美術館 年間パスポート「TOPMUSEUM PASSPORT 2022」のご案内

展覧会を無料または割引でご鑑賞いただける年間パスポートを販売いたします。

ご本人様に加えて、同伴の方1名様もご利用いただけます。ミュージアム・ショップでのお買い物も5%引きになる(一部商品を除く)など、たいへんお得です。

【販売価格】 3,300円(税込)

【販売期間】

2022年4月1日 - 2022年9月30日(予定)

【有効期間】 2022年4月1日 - 2023年3月31日

【販売場所】 当館1階総合受付

Tokyo Museum Collection - 東京都立博物館・美術館収蔵品検索のご紹介



Tokyo Museum Collectionは、6つの都立ミュージアム(江戸東京博物館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、東京都庭園美術館、東京都美術館、江戸東京たてもの園)が収蔵する資料・作品を、横断的に検索できるとしても便利なデータベースです。

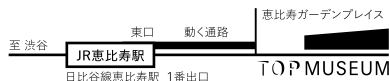
約40万点もの
所蔵資料・
作品を公開

掲載資料・作品
情報は随時更
新・追加予定

コレクションハイライト
では、各ミュージアムが
収蔵する注目のコレク
ションを解説付きで紹介

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099 topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00まで) ※入館は閉館30分前まで。

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始、臨時休館

JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

東京都写真美術館ニュース「アイズ2022」108号 □発行日:2022年2月26日/企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2022 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。